

追悼

# 宮川康一先生を想う

横浜支部長 洞澤 繁



元理事の宮川康一先生（横浜市緑区）は旧歯科部会や公害環境対策部、文化部、横浜支部で長年ご活躍されてきた。2025年9月25日に永眠。享年80歳。

宮川先生は会議室から音を立てて席を立つて、どことなく語りだす短い言葉で、的確なアドバイスをし

てくれる……先生にはそんな「魔力」があった。保険医協会の横浜支部長をされていた頃も、いろいろな場面で、その魔力を私は目撃した。政治家と議論するときも、決して感情的にならず、ゆつくりとした口調で語りかけていく、そしていつのまにか相手は反論するどころか催眠術にかかったように、うなずくばかりの状態になってゆく……。

私は不真面目な歯科医な



約り大会でトップ賞。左は前理事長・森壽生先生。

また、人脈の幅広さもスケールを超えていて、政治家、文化人、研究者、業界の重鎮……など、その人間力に魅了された人々は数知れないのである。ある集会では、先生と挨拶を希望する人々が列をなし、私は臨時の整理係をしたこともあった。

私は先生からまともな引継ぎもせず、横浜支部長を継ぐことになった。まるで、

## 地域医療学習会 「医療費相談室」を上手に使おう

地域医療対策部は2月10日、神奈川県医療ソーシャルワーカー（MSW）協会と共同で学習会を協会会議室・WEB併用にて開催。『「お金がないから…」と治療をあきらめている患者さんはいませんか?』をテーマに、44名が参加した。



講師の佐野氏

会では、実際の「医療費相談室」の相談事例に基づくロールプレイを行い、MSW協会の佐野晴美会長と疋田勝監事が制度を解説した。経済的不安による検査入院の拒否事例には、高額療養費制度や入院時の食事・居住費負担を抑える「境界層該当者」について説明。在宅介護の限界による施設入所の検討事例には、要介護認定の区分変更申請の活用や、施設を見学する際に実際の居室を見る等のポイントを伝えた。

最後に、費用負担の悩みは患者自身からは言い出しにくいものであることを強調。相談場所の一つとして、保険医協会とMSW協会が毎月第3水曜日に協力開催する「医療費相談室」があることを、医療機関から積極的に発信してほしいと呼びかけた。



講師の疋田氏

## 活動報告

quick reports

# エゴン・シーレと 医学的身体表現

川崎市川崎区 谷本 哲也

捻じれた身体で知られる表現主義の画家が、実は医学誌の症例写真を参考にしていたという驚きの事実。28歳でスペイン風邪に倒れた天才の、病める芸術家像の戦略的な演出とは—（毎月1回連載）。

オーストリア表現主義の天才エゴン・シーレ（1890-1918）の作品に見られる捻じれや歪んだ身体表現は、しばしば観る者に強烈な印象を与える。内省的・心理的で、人間の内面の不安、エロス、死や孤独を主題とし、独特のざらつきを持つ作品をウィーン世紀末に現出させた。彼の自画像や肖像画に描かれる特異な姿勢は、一見すると神経疾患のジストニアを思わせる。シーレ自身が実際に

この病気を患っていたのではないかという憶測も呼んでいた。しかし医学史研究者の詳細な調査によれば、シーレがジストニアを患っていたという医学的根拠は全く存在しない。むしろ、彼の独特な身体表現は、当時のウィーンの知的環境と深く結びついた戦略的な芸術技法だったのである。

19世紀末から20世紀初頭のウィーンでは、フロイトの精神分析学が台頭し、人間の内面と身体表現の関係が注目されていた。同時に、ジャン・マルタン・シャルコーが働き神経学のメッカとして有名だった、パリのサルペトリエール病院で発行の『サルペトリエール写真図譜』などの医学誌がヨーロッパ中に流通し、ヒステリーや神経疾患患者の異

常な身体姿勢を報告した写真が知識人たちの間で話題となっていた。シーレは、病理解剖学者エルヴィン・フォン・グラーフなどの医師の友人を通じて、これらの医学写真に接する機会があった。例えば、彼の作品のいくつかに見られる、異常に長く、誇張された手指の位置や身体の前、パンデミックとなったスペイン風邪により28歳で夭折したシーレの短い生涯は、彼の作品に込められた

重要な身体表現と重なり合っている。彼の芸術は、医学と芸術、内面と表現、戦術と真実が複雑に絡み合った、20世紀初頭のウィーンの文化的状況を象徴する貴重な証言なのである。

研究部は2月11日、第42回糖尿病セミナーをWEB開催。メインテーマを「糖尿病、長生きのその先を考える」として2名の講師が講演し、医師・歯科医師・コメディカル等93名が参加した。

はじめに、国立がん研究センター中央病院糖尿病腫瘍科の大橋健氏が「糖尿病とがんの見逃さない・支えるための基礎知識」をテーマに講演。氏によると、糖尿病を持つ患者の約1割は、20世紀初頭のウィーンで見逃さないうちに、①意図しない体重減少、②目の低下・貧血、③説明できない血糖コントロールの悪化、

（CKD）の概要と透析の種類、そして、透析をしない選択肢（保存的腎臓療法／CKM）について解説。特に、透析導入のリスクについて言及し、高齢者の場合、治療による身体への負担により患者のQOLを低下させ、最悪の場合死亡リスクを高める可能性があることを説明。そこで、患者のQOLを重視する「CKM」という選択肢を提案し、透析を導入せず、基本的な腎臓病治療の継続や無理な食事制限を行わない緩和ケアに重きを置いた治療法について解説した。この透析導入の実施有無の選択は、患者・医療従事者間の共同意思決定（SDM）が不可欠であり、適切な医学的助言を行いながら、患者がいつでも意思を変更できるような柔軟な対応が重要であると結んだ。

医科学から読み解く 西洋画家の物語 ~第2回~



グスタフ・クリムト『エミーリエ・フレデーの肖像』、1902年、ウィーン・ミュージアム（事務局撮影）

グスタフ・クリムト『エミーリエ・フレデーの肖像』、1902年、ウィーン・ミュージアム（事務局撮影）

重要なのは、シーレがこうした医学的イメージを単に模倣したのではなく、表現主義的な感情表現と市場戦略を巧妙に組み合わせ、当時のウィーンで活躍していたことである。当時のウィーンは、グスタフ・クリムト（1862-1918）に代表される分離派の装飾的

研究部は2月11日、第42回糖尿病セミナーをWEB開催。メインテーマを「糖尿病、長生きのその先を考える」として2名の講師が講演し、医師・歯科医師・コメディカル等93名が参加した。

はじめに、国立がん研究センター中央病院糖尿病腫瘍科の大橋健氏が「糖尿病とがんの見逃さない・支えるための基礎知識」をテーマに講演。氏によると、糖尿病を持つ患者の約1割は、20世紀初頭のウィーンで見逃さないうちに、①意図しない体重減少、②目の低下・貧血、③説明できない血糖コントロールの悪化、

（CKD）の概要と透析の種類、そして、透析をしない選択肢（保存的腎臓療法／CKM）について解説。特に、透析導入のリスクについて言及し、高齢者の場合、治療による身体への負担により患者のQOLを低下させ、最悪の場合死亡リスクを高める可能性があることを説明。そこで、患者のQOLを重視する「CKM」という選択肢を提案し、透析を導入せず、基本的な腎臓病治療の継続や無理な食事制限を行わない緩和ケアに重きを置いた治療法について解説した。この透析導入の実施有無の選択は、患者・医療従事者間の共同意思決定（SDM）が不可欠であり、適切な医学的助言を行いながら、患者がいつでも意思を変更できるような柔軟な対応が重要であると結んだ。

（CKD）の概要と透析の種類、そして、透析をしない選択肢（保存的腎臓療法／CKM）について解説。特に、透析導入のリスクについて言及し、高齢者の場合、治療による身体への負担により患者のQOLを低下させ、最悪の場合死亡リスクを高める可能性があることを説明。そこで、患者のQOLを重視する「CKM」という選択肢を提案し、透析を導入せず、基本的な腎臓病治療の継続や無理な食事制限を行わない緩和ケアに重きを置いた治療法について解説した。この透析導入の実施有無の選択は、患者・医療従事者間の共同意思決定（SDM）が不可欠であり、適切な医学的助言を行いながら、患者がいつでも意思を変更できるような柔軟な対応が重要であると結んだ。

## 第42回糖尿病セミナー 長生きのその先を考える



講師の大橋氏

講師の押川氏

研究部は2月11日、第42回糖尿病セミナーをWEB開催。メインテーマを「糖尿病、長生きのその先を考える」として2名の講師が講演し、医師・歯科医師・コメディカル等93名が参加した。